

書 評

菊池嘉晃著『北朝鮮帰国事業
「壮大な拉致」か「追放」か』（中央公論新社二〇〇九）

畑 山 康 幸

一九五九年十二月に始まり一九八四年まで続いた在日朝鮮人の北朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国への帰国事業（帰還事業）は、昨年、五十周年を迎えた。この帰国事業では九万三〇〇〇人余りの在日朝鮮人や日本人配偶者らが日本海を渡って行った。日本の各紙をはじめとして、北朝鮮の『労働新聞』、韓国の『朝鮮日報』もこれに関連した記事や特集を組んだ。『労働新聞』は金日成、金正日の「同胞愛の結実」とする社説を掲載したが、その一方で日本や韓国の新聞は、北朝鮮に渡った人々の多くが劣悪な生活環境、監視と密告等に直面し、強制収容所に収監された悲劇も少なくないと伝えている。近年、その北朝鮮から元帰国者らが日本へと舞い戻って来る動きが続いている。

菊池嘉晃著『北朝鮮帰国事業「壮大な拉致」か「追放」か』は、在日朝鮮人の北朝鮮への帰国事業を、その淵源から実現に至る経緯、そしてその現在を、関係諸国・諸団体の動きを含めて歴史的にトレースし、なぜこの事業によって悲

劇が生まれたかを追求したものである。

著者・菊池嘉晃氏は一九六五年東京に生まれ、讀賣新聞の記者、編集者として朝鮮半島問題にたずさわっているジャーナリストである。一九九四年には韓国に留学、帰国事業について研究した。本書は

「序 章 問い直される帰国事業」

「第1章 「在日社会」の激動・戦前・朝鮮戦争」

「第2章 朝鮮戦争と帰国運動の始まり」

「第3章 帰国実現の模索」

「第4章 帰国事業をめぐる攻防」

「第5章 北朝鮮はなぜ「帰国」を推進したか」

「第6章 なぜ「未知の祖国」へ渡ったか」

「第7章 なぜ「帰国」は四半世紀も続いたか」

「第8章 「虚構の楽園」での悲劇」

「終 章 現在進行形の問題」

からなっている。菊池氏は帰国事業とそれによってもたらされた帰国者の境遇を「現在進行形の問題」ととらえ、依然として解決されぬ多くの課題が内在していると指摘している。

本書は、関係諸国・諸団体の利害が複雑に交差するこの問題を、当時の資料を活用しながら、多角的にかつ客観的に分析・記述し、その本質に接近しようとしている。

これまで帰国運動は、川崎市に住む在日朝鮮人が一九五八年に集団帰国決議をしたことがそのきっかけとされてきた。菊池嘉晃氏はこうした通説に対して朝鮮戦争停戦直後に起きた在日朝鮮統一民主戦線（民戦）による帰国運動や、一九五五年後半から日本赤十字社が在日朝鮮人の帰国を模索していたことなどを明らかにしたうえで、注目すべき史料と見解を提示している。菊池氏は、旧ソ連外交文書（ペリシエンコ日誌）に依拠して、金日成が「帰国運動が自発的に高揚したように見せかけ・・・帰国を実現させるといふシナリオを描いていた」ことを明らかにした。

ともあれ、日本と北朝鮮は、国際赤十字の仲介を得ながら一九五九年八月にカルカタで「帰還協定」を結び、十二月には第一船が新潟港を出港したのであった。菊池氏は、日本政府が治安・財政上（生活保護費）の負担軽減等をねらって「在日排除のため帰国事業を推進した」とする見解に対して、これを「一面的な解釈」とし、「総合的な判断の下に、帰還実施を決断した」との立場を示している。またその一方で、北朝鮮にはシナリオと工作があり、「社会主義の優位性宣伝と対南戦略」「経済的利益」を帰国事業の主目的としたことをあげている。この分析は、帰国事業が北朝鮮の「日本との国交正常化を目標とした人民外交の手段」（『帰国運動

とは何だったのか』平凡社）であつたとする一部研究者への批判でもある。

在日朝鮮人の多くは朝鮮半島南部の出身である。にもかかわらず、九万人もの人々がなぜ北朝鮮に帰国したのか。この背景には、生活苦や民族差別、子女の教育・就職問題などと従来から指摘されてきた。さらに、誇張した宣伝によって「北朝鮮への幻想」が生まれ帰国意思が形成されたとも言われている。菊池氏は、こうした点についても当時のさまざまな資料や証言を引用しつつ、帰国決断の背景を補強している。

帰国事業において、最大の問題は北朝鮮へ渡った在日朝鮮人がきびしい政治的、経済的状況に置かれ、さまざまな「悲劇」が生じたことであろう。現在、日本には、北朝鮮を脱出し舞い戻って来た人々が約二〇〇人いるとされている。こうした人々の手記や証言から、夢と希望をもって帰国した北朝鮮が「地上の楽園」ではなく、「宣伝とかけ離れた」世界であつたことが明らかにされた。

ところが、本書では意外な事実が明らかにされている。平壤のハンガリー大使の報告によれば、帰国者は「食糧配給でめぐまれ」、工場に配置された帰国者は一般国民よりも「高い賃金」を得ていた、というのである。その一方で、この大使は帰国者が社会主義体制独特の生活様式に適応できなかったことをあげている。帰国者の状況を東欧外交官の報告を活用し明らかにしたのは特筆すべきことである。

しかし、こうした優遇にもかかわらず、

帰国者の生活レベルは日本のそれには及ばず、なかには当局の監視下におかれ、「スパイ容疑」をかけられて収容所に送られるケースが相次いだ、とも本書は述べている。

終章では、この帰国問題が「現在進行形の問題」であるとしながら、当時、送りだした側の朝鮮総連、日本政府、日本赤十字社、運動を後押しした支援者や団体の対応を「改めて問い直す必要がある」と訴えている。

さらに菊池氏は、悲劇を生んだ直接的な要因として「北朝鮮国内の人権抑圧体制」、「宣伝と情報統制」の二点をあげている。そしてこの二大要因に目を向けず、他の要因により大きな問題があるかのように主張する論者に対して「意図的に問題の核心から目をそむけている」と、きびしい批判も行っている。本文では論者の名を直接あげていないわけではないが、これは『北朝鮮へのエクソダス』『帰国事業』の影をたどる（朝日新聞社）の著者テッサ・モリス・スズキへの批判である。評者も、モリス・スズキの見解には、かねてから疑問をいだいており、この点で菊池氏の批判はポイントをついたものとなっている。

北朝鮮は今でも、帰国者が「価値の高い人生」（『労働新聞』十二月十六日付）を送っていると主張し、基本的人権を擁護していないという批判に対しても、それを真っ向から否定している。本書では、いくつかの北朝鮮・総連資料をあげているものの、北朝鮮自身が政府、党、赤十字などの一次資料をいまだ公開していないため、

帰国者が北朝鮮でどのような処遇をうけたのか、またうけているのかという核心部分の解明は不十分である。それだけに北朝鮮側の情報公開が切に望まれるところである。

また帰国者のなかからは、文化相になった張徹（故人）のほかに、人民芸術家や人民俳優、さらには社会科学歴史研究所所長、大学教授など、「党と国家の要所」の働き手を輩出しているのも事実である。評者は、こうした「成功者」と「悲劇」をまねいた人々との差が、金日成・金正日に対する政治思想的忠誠度を基準とする北朝鮮の全体主義的政治体制に由来していると考えており、この点は「現在進行形」の課題として、今後さらに解明すべきテーマである。

本書は、的確な視点に加えて客観性を重んじ、徹底した「実事求是」の姿勢で調査研究に取り組んだ成果である。簡潔で分かりやすい文章に加えて、全体の構成もしっかりとしており、これまでの研究成果も反映されている。この問題に関心を持つ人々にとって必読の書であり、最良の一冊である。

評者は、本書が朝鮮語に翻訳され、北朝鮮で暮らす帰国者とその二世、三世をはじめとするすべての朝鮮半島の人々に読まれることを望んでいる。さらに、英語等にも翻訳され、この問題に関心を持つ諸外国の人々にも、正確で客観的な事実関係が提示されるならば、一部の偏見に満ちた主張を正す機会ともなるのではないだろうか。

（はたやまやすゆき・NHK放送研修センター E P、朝鮮文化論）